

---

# とある聖人の恋愛作戦

バヌケソ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある聖人の恋愛作戦

### 【Nコード】

N1941Q

### 【作者名】

バヌケソ

### 【あらすじ】

神崎火織が上条当麻に積極アプローチ！？神裂火織、土御門元春、ステイル・マグヌスの3人による恋愛劇が今幕を開ける！

注）筆者が連載中の『とある少女の恋愛作戦』の二番煎じ的内容です。御了承下さい。また、『とある少女の恋愛作戦』とは別の世界の話だと思って下さい。

## 作戦開始（前書き）

ふと思いついたので旧作ほったらかして作ってみたでござる。

## 作戦開始

とある街角の喫茶店。

決して繁盛はしていないが、チェーン店には無い落ち着いた雰囲気を持つそこに、二人の男女が入店した。

身を屈めながら入口を潜って来たのは、修道服を来た赤髪・長身の男、ステイル、マグヌス。

目の下にはタトゥ、指には多数の指輪、そして全身からは甘ったるい香水の匂い。

その井出達は、誰が見ても一般人からかけ離れていた。

そしてその後ろからもう一人が、黒髪を後ろに纏めた美女、神裂火織。

横で縛ったシャツに片足を露出したジーンズと、服装だけ見ればそれなりに一般的である。

しかし腰に差した日本刀は、有る意味ステイル以上の存在感を放っていた。

「おい、こつちだ」

そしてもう一人、店内から二人を呼ぶ男がいた。

上条当麻の親友にしてイギリス正教と学園都市の多角スパイ、土御門元春。

金髪にサングラスというチンピラファッションであった。

こうして個性的過ぎる3人が集結したのであった。

「二人とも悪いにゃー、急に呼び出して」

二人に軽く謝罪を入れる土御門。

ステイルと神裂をここに呼んだのは彼であつた。

「構いませんよ、今日は特に予定は有りませんので」

「それで、話とは一体何なんだい？」

「ああ、それなんだが」

土御門のサングラスの奥の眼光が鋭く光った。

普段は非常に軽いノリで話すこの男が、今日は珍しくのっけからシリ阿斯モードである。

その空気はステイルと神裂にも伝わり、場に緊張が走る。

「必要悪の教会からの指令が届いてな」

二人の表情が一層険しさを増した。

息を飲み、土御門の次の言葉に耳を傾ける。

「指令の内容は…」

土御門はゆっくり口を開き

一言だけ告げた。

「ねーちゃん。上やんの女になれ」

「…は？」

神裂は勿論、ステイルも思わず耳を疑った。

「い、今、なんと…」

「だから、上やんと付き合えって言ってるんだにゃー」

「はああ!!!!???.?」

神裂の素っ頓狂な声が店内に響き渡った。

店中の視線が突き刺さり、神裂は思わず咳払いする。

「ま、そういう事だからねーちん、宜しく頼んだにゃー」

まるで子供にお使いを頼むようなノリの土御門。

「じょじょ、冗談じゃありませんよ！なんで私が彼と…！」

「俺も全力でサポートするから安心するぜよ」

「いやそついう問題ではなくて！色々と突然過ぎるんですよ！」

神裂は、普段の落ち着き払った態度からは想像できないほどに取り乱していた。

まあ普段から少し意識している男と突然交際しろなどと言われたのだから、当然の反応かもしれないが。

そんな神裂とは対照的に、ステイルは酷く冷めた目をしていた。

「ふん、何かと思えばこんな下らない話だったとはね。悪いけど僕は帰らせてもらうよ」

どうやらあまり興味の向く話ではないらしく、ステイルは早々に席を立ち去ろうとする。

それを制止したのは土御門。彼も立ち上がり、神裂に背を向ける形でステイルの肩に腕を回した。

「ちょっと待つんだにゃーステイル」

「…何だい？僕にはあまり関係の無い話だと思うけど？それに上条当麻とはあまり関わりたく無いんだが」

「おいおい、よく考えてみるんだにゃー。上やんがねーちんとくっ付けば、インデックスと上やんが結ばれる事は無くなるんだぜい」

「！」

ステイルに電撃が走った。

「そして、一人になったインデックスは、お前と…」

「ばばバカ、不謹慎な事を言っな！僕は別に…！」

そこまで言うと、ステイルは土御門の腕を払いのけながら振り返り「くっ…分かった分かった、手伝ってやればいいんだろ！？ただ言っておくが、あくまで神裂の補助が目的であって、決していあの子のためではないからな！」

言い訳混じりに了承した。意外と単純な男であった。

「へいへい分かってるぜよ…」

土御門は嘔き出しそうになるのを必死に堪えつつ、神裂きの方を振り返った。

「ってな訳だねーちゃん、ステイルも協力してくれるってよ！」

「しかし土御門、一体どういう理由でこんな指令を出て来たんだ？」

「というより、本当に上からの指令なんですよね！？」

「当然だにゃー。ま、詳しい理由は聞かされてないが、恐らく上やんの監視及び情報収集といったスパイ的な意味合いが強いと思うぜよ」

流石の神裂も、上からの指令とあらば従わざるを得なかった。

「…分かりました、そういう事なら仕方ありません…」

神裂は観念し、肩を震わせながら了承した。

「よし、決まりだにゃー！張り切って行こうぜい、ねーちゃん、ステイル！」

妙に楽しそうな土御門であった。

かくして3人による大作戦が幕を開けるのであった。

## 作戦開始（後書き）

設定のあり得なさにはどうか目を瞑って下さいホントお願いします。

こんな内容でよければ、『とある少女の恋愛作戦』と併せてどうぞお付き合い下さい。

## 情報収集（前書き）

前話の場面の続きです。  
喫茶店はまだ出ていません。

## 情報収集

そろそろお開きか、という空気が流れ出した頃、土御門が思い出したように口を開いた。

「ああそうそう、ねーちゃんに渡す物があつたんだにゃー」

そう言つて神裂の前に二つの物を差し出した。

1つは、地図と住所が書かれた紙切れ。

もう一つは、住居の玄関の物と思われる鍵。

「おいおい、滞在先まで用意してあるのかい？」

呆れたように言うステイル。

「御明答！んーちゃんにはしばらくここに住んで貰うにゃー」

「何でそこまで準備が良いんですか！？こんな訳の分からない任務に！」

「なに言つてんだねーちゃん、これはマジな仕事だぜい」

心の中で『多分』と付け加えたのは内緒だ。

そんなこんなで漸くこの場はお開きとなり、3人はそれぞれ帰路へ着いた

\* \* \* \* \*

神裂が地図を頼りに辿り着いた先は、ありふれたマンション。

その一室が神裂に用意された部屋であり、内装等もごく普通であった。

既に日は完全に沈み、窓の外では街灯が幻想的な光を放っている。

それをぼんやりと眺めるようにして、神裂は窓際に佇んでいた。

『上やんの女になれ』

頭の中では、昼の土御門の衝撃発言が繰り返し再生される。

魔術師、そして聖人として、神裂は数々の任務をこなしてきた。

越えて来た修羅場も数知れない。

そんな神裂をもってしても、今回の任務は今までのどんな物より困難な物に思えた。

恋愛経験に乏しいため、まずどうすればいいかすら思い付かない。

正直途方に暮れている状態であった。

そして、上条の事も考えていた。

人並み外れた勇気と正義感を持ち右手一本で困難に立ち向かっていく男。

そんな彼に何度も救われ貸しを作り、いつしか少なからず惹かれて  
いる自分がいた。

だがそれが恋愛感情であるかどうかは自身にも分からなかった。

「あ…」

そんな事を考えていたさなか、神裂はある事を思い出した。

「土御門は彼の連絡先を知っている…」

プライベートで彼と親友関係にある土御門なら電話番号やメアドを  
当然知っている筈。

それらを聞き出せば少しは光明が見えてくるのでは…

そう思い立った神裂は早速土御門に電話する。

「…もしもし？」

「おおねーちゃん。どうだ、用意した部屋は気に入ってくれたか？」

「悪くはありませんね。それより彼の連絡先を知っていますよね？  
いま教えてもらいたいのですが…」

これに対し、土御門はやや間を空けてから答えた。

「…残念ながらそれは出来ないにやー」

「え！？」

予想外の返事を返された神裂は思わず大きな声を上げた。

「な、なぜですか！」

「いや、俺がアツサリ教えちゃったんじゃ展開的につまらんぜよ」

「これは『マジな仕事』だってさっき言っていましたよね！？だった  
らそんな理由で…！」

「それに直接聞きに行く方が仲が深まるってもんだにやー。あ、ちなみにステイルに聞いても無駄だぜい、もうも口止めしといたから  
てな訳で、頑張って聞き出してくれい。そんじゃ！」

「ち、ちよつと…！」

一方的に通話を切られた。

通話終了を知らせる電子音が耳元で繰り返される。

思わずケータイを握り潰そうになる神裂。

「くっ…止むを得ません…」

納得いかないながらも、直接会いに行く覚悟を決めるのであった。

## 情報収集（後書き）

ねーちゃんって、原作で上やんのメアド知ってましたっけ？  
もし知ってるって設定ならゴメンナサイ。

今後こういった原作無視が起きてしまうと思いますがどうかお許しを。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1941q/>

---

とある聖人の恋愛作戦

2011年3月28日05時13分発行